

名北の空の下

名古屋北労働基準監督署長 水谷 隆宏

Well-being



てまいりました。世界経済フォーラムの創設者であるクラウスシュワブ氏は、「世界の経済システムを人々の幸福を中心とした経済に考え直すべき」と唱えております。

WHO設立の際の憲章にこの単語はすでに使われており、言葉自体は新しいものではありません。また国連が定めたSDGsの目標の中にもこの言葉が入っております。当初は、医療・福祉分野で使われた言葉でしたが、現在はさらに広がり、経済的、社会的に人が生きていくための「目的」そのものに変化してきているようです。

地球環境の破壊が進み、人類社会の持続可能性が模索されている中、Well-beingはグローバルで注目を集めるようになってい

していくため、「幸せ」を基本理念に据えたり、トップが表明したりするところが多くなつてまいりました。

労働により得られる報酬や社会的地位とは別に、事業活動や仕事そのものによつて満足感が得られるようになれば、会社への愛着心が育まれ、モチベーションも上がり、企業業績にとつてプラスとなることは間違いありません。Well-being経営に直結している働き方改革やハラスメント対策などは、これからもますます重要になってくることでしょう。

近年、政府ではWell-beingに関する関係省庁連絡会議が設置され、個人と社会全体のWell-being向上を目指し、各政策分野におけるKPI（重要業績評価指標）へのWell-being指標の導入を進める方針を打ち出しております。これに関連し、我が国の経済社会の構造を人々の満足度の観点から多面的に把握し、政策運営に活かすことを目的とした「満足度・生活の質に関する調査報告書」なども示されております。

また、企業においてもWell-being経営を推進

世界幸福度ランキングというものが毎年公表されています。2022年版ランキングによりますと、日本は146か国中54位で先進国の中では最低クラスでした。

このランキングは、一人当たりGDPや健康寿命、社会支援などの指標について各国民の主観的

意識を総合調査して出されたものですが、これらの指標以外にも「寛容さ」、「デイストピア（主観満足度）」というような評価項目があります。日本は後者の評価がかなり低いために総合ランキングが下がってしまったというようです。GDPや健康寿命は高評価を獲得していますので、このランキングには「他人と距離を置きたい」、「楽しい気持ちになれない」というようなネガティブな感情が如実に表れているように思います。

Well-beingを重視した働き方や生活様式が浸透し、多様性や地域の絆が社会に広く受け入れられるようになれば、日本人の幸福度はもつともつと上がるのではないのでしょうか。

イラスト・木村武司

最近、Well-being（ウェルビーイング）という言葉がよく聞かれるようになりました。一般的には心身及び社会的な健康を意味し、満足した生活、充実した状態など多面的な幸せを表すものだといわれております。瞬間的な幸せであるHappinessではなく、持続的な幸福感とでもいうのでしょうか。